

人権だより

令和3年3月16日発行

第15号

人権課

☎229-3165 FAX 229-3366

知っていますか シトラスリボンプロジェクト

シトラスリボンプロジェクトとは、愛媛大学の教授らのグループ「ちょびっと19+」が、新型コロナウイルス感染者や医療従事者らへの偏見や差別をなくそうと立ち上げたプロジェクトです。



愛媛県特産のかんきつ類をイメージした黄緑色のリボンを「地域」「家庭」「職場・学校」を示す3つの輪に結んだデザインになっています。感染が確認された人や

暮らしを支えてくれる医療従事者をはじめとするエッセンシャルワーカーの皆さんなどが、それぞれの地域で笑顔で「ただいま」「おかえり」と言い合えるまちであるようにという願いが込められています。

新型コロナウイルス感染症に関する不当な差別、偏見、いじめは決して許されるものではありません。津市はこのプロジェクトに賛同し、感染した人等が特定や排除されることのないよう差別をなくす取り組みを進めていきます。

コ ラ ム

自分の差別心と向き合うということ

「自分には差別心はない」と思ってきた。10歳から施設で育ち、多くの人の助けを得て何とかやってこられた自らの人生を通し「人種や性別、出身地や障がいの有無などで人を見ることの無意味さ」を理解していたつもりであった。

そんな私の差別心について、気付かせてくれたのは祖母だった。祖母は物心ついた時から統合失調症で入院しており、盆や正月などに時折帰ってくることはあったものの、それ以外は病院で会うのが常だった。幼い頃は、ずっと病院にいる祖母を「かわいそうなばあちゃん」と思っていた。年齢を重ねていくうちに、それに加えて「恥ずかしいばあちゃん」という感情が膨らんでいった。祖父や祖母の話題になった時には、少し遠くにいるもう一人の祖母のことを話し、入院している祖母のことに自分から触れることはなかった。

それでも成人後は二十数年にわたり、2、3カ月に1回のペースで面会に行っていた。しかし祖母が話すことは、ほとんど聞いていなかった。眉をしかめ早口に語るその時間が終わるのを、ひたすら待っていた。時々、ごはんを食べに行っても、「毒を入れられる」などと言うため、笑顔を見た記憶や楽しかった思い出もほとんどなかった。ただ、懸命に世話をしている母が「たまにはおばあちゃんに会いに来たって」と言うので、半ば義理で足を運んでいたにすぎなかった。

2020年に入ると、コロナ感染予防のため、面会や外出が基本的にできなくなり、半年以上祖母に会うことはなかった。9月に入った頃、母から「おばあ

ちゃん、もう長くないみたい」と連絡が入り、久しぶりに病院に行った。89歳になったばかりの祖母は、もうほとんど喋れなくなっていた。看護師さんからは、「耳は聞こえてるから、たくさん話したってね」と言われた。半年前まで、ひっきりなしに喋っていた祖母は、何も言わずゆっくりとこちらに視線を向けてきた。眉をしかめるような表情もなくなっていた。それは同時に、私のことを認識できなくなったことも意味していた。

このような状況になって初めて、祖母と穏やかな気持ちで対面することができた。今までも話す時間や機会は無数にあったが、「どうせ妄想やろ」と決めつけ、まともに向き合おうとしてこなかった。ずっと「恥ずかしいばあちゃん」「病気のばあちゃん」という見方しかしてこなかった。

それは、自分の中にあった「差別心」そのものだった。「私は一番身近で大切な人を差別してきた」という事実が体中を駆け巡り、こんな時が来るまでそれに気付かなかった自分に呆然とした。ベッドの上で穏やかな表情を浮かべる祖母の傍らで、「ばあちゃん、ごめん」と耳は聞こえているという言葉信じて、何度も繰り返した。

数日後、祖母を火葬するとき、やはり最後は感謝を伝えたいと思った。今自分がここにいるのは、紛れもなく祖母がその人生を懸命に生き抜いてくれたおかげである。「ばあちゃん、ありがとう」。最後の最後に、何も枕詞が付かない「ばあちゃん」として呼び掛けることができた。しかし、生きていたうちにその言葉や思いを届けたかった、という大きな後悔も残った。

差別や偏見は、自分の一番身近な人とのつながりさえも奪ってしまう。私はもうこのような後悔をしたくない。だからこそ、これからも自分や世の中にある差別・偏見に向き合っていきたいと思う。